
霸王伝____蒼剣の舞い

蘭 凌邑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霸王伝——蒼剣の舞い

【Nコード】

N3271I

【作者名】

蘭 凌邑

【あらすじ】

自ら主を選び、手にする者を霸王に導くと云う伝説の天下覇道の剣“蒼剣”を巡り、否応なく天下争奪の渦に巻き込まれていく主人公、清雅。

そんな彼の暗殺に刺客を放つ二人の異母兄、蒼剣の真の力を目指させぬ内に奪取しようと清雅と仲？たちに迫る。

更に、複雑怪奇な因縁が絡み、遂に異母兄を倒す事を決意する。

序章

その地は、とても平和であった。国も人も何の憂いもなく、戦も起こらぬ平和な地であった。

彼の地を統一し王となった男は、霸王はおうと呼ばれ、以後その名は代々受け継がれていく事になる。

だが、いつからだろう。霸王が、欲望の対象になったのは。力でねじ伏せれば霸王に誰でもなれると、云われるようになってしまったのは。

そう、すべては一降りの剣から始まったのだ。

天を裂くと云う力を秘めた、霸王だけが手に出来る剣“蒼剣”そうけん。この剣が、人の欲を膨らませ、やがて戦わせしめる。だが、蒼剣はそれだけではない。己の主を選ぶ意思をもっていた。

後に、かの地は四つに分かれ、四人の王がそれぞれの地を治めるに至る。前の霸王が後継を誰と遺言しなかったのと、蒼剣が霸王の死去と共に姿を消した為だ。

霸王の死から七年後——かの地“四国”は再び大きく揺れ動く。

「——陛下、蒼王陛下」そうおう

蒼天下、一人の男が大樹の上に向かって叫んでいる。

「そこにいらっしやるんでしょう。皆様、お待ちです」

「白虎、お前に任せる」

「冗談じゃありません。吾に陛下わたくしの代役が務まるわけないでしょう。いい加減、観念したら如何です？」

「何を観念しろと云うんだ？」

「王として、政務に励む」

「無理だな。柄じゃねえ」

樹の上の男は、枝での上で長身を伸ばし桃を囓った。

蒼国は、東にある四国の中でも小国である。

その国主・蒼王は、この年二十五歳。七年前までは、賊相手に剣を振るっていた自由戦士だったが、突然蒼国の王に担がれた。理由は二つ、彼が前霸王の四番目の子供であった事。もう一つは――。

「蒼剣が貴方を認めたんですよ、陛下」

「白虎、その陛下はよせ。俺は蒼王になんざなりたくなっただけじゃねえぞ。あのくそ親父、俺に王になれと云っておきながらとっと引退しやがった」

「もしかして、玄武どのの事ですか？」

王と呼ばれるには、口の悪い男は漸く樹から降りてきた。

「そもそも、玄武があのか剣を持ってきたんだ」

背まで流れる癖のある髪を乱暴に掻き上げ、蒼王は苛立ちを露わにした。

「玄武どのは、霸王陛下の側近中の側近でしたから」

「だったら、黒抄くせうに持っていけばよかったろうが。黒狼くろうが大喜びするのは間違いなしだぜ」

「陛下…、兄君ですよ」

「その兄君さまが、誰の命を狙ってる」

「蒼剣を渡しても、諦めていたたけないでしょうね…」

「益々腹が立ってきた」

蒼王は、その苛立ちを持て余しながら城に戻った。

着替えをと云う周囲を制し、自由戦士そのままの姿で現れた若き王に、もはや驚く者はいない。

蒼剣が選えらびし王――蒼国・王城に集う者たちは文句なしにこの風変わりな王に膝をついた。

七年前、前霸王が手にしていた蒼剣が、未だ蒼龍そうりゅうの清雅せいあと呼ばれていた彼の前で蒼く反応した時から。

これが、彼の異母兄である北の黒抄国主・黒狼のプライドを傷つけるに至った。

前霸王と正室の間に生まれた霸王家出身であり、当然自分こそ四国の次の霸王と想っていた彼に、末弟・清雅の王らしくない行動は遠く離れても知っていた。

お互い、初めから兄弟の情はなかったが、蒼剣が清雅の手にあると知ってその憎悪は、もはや修復不可能になっていた。

蒼剣は、自ら主を選ぶ。そしてその主が死す時、次なる主を求めて彷徨う。

清雅が死ねば、蒼剣は自分のもの。黒王、黒狼はそう考えているのだ。

彼だけではない。霸王になれるのは何も霸王家の血筋だけとは限らない。蒼剣は身分を問わない。清雅が父を霸王に持ちながら、母は平民出身で、彼自身野育ちである。

その蒼剣が清雅から離れれば、天下欲しさに群がる人間は少なくはない。

この時は未だ、蒼剣の本当の力は発動していなかった。それが何を意味するのか。

蒼剣は、使い手に清雅を選んだが霸王ではない、と云う事である。天を裂くという力は、霸王でなければ発動しない。

そんな、清雅の元に今集う者がいる。

七年前、四散した精鋭。蒼龍、白虎、玄武、朱雀——霸王に従う四武將。その名を四獸聖^{しじゅうせい}。

清雅はその四獸聖の一人・蒼龍であり、白虎と呼ばれる王城での王の側近も、四獸聖の一人であった。

「暫く来ないうちに、とんでもない事になってない？セイちゃん」清雅がさっきまで寛いでいた樹の枝で、赤い髪の青年が笑っている。

今、この四国で何かが大きく動き出す。

再び、一つになるために。

第1話 四獣聖

四国——嘗て一つの帝国だったかの地は四人の王と四つの国に分かれた。

北に黒抄こくしょう、西に白碧はくへき、南に紅華こうか、東に蒼国、再び霸王の元に一つになるべく一本の剣が人々を吸い寄せる。

その剣の名は“蒼剣”——その力は天を裂き、自ら使い手を選ぶという意志を持つ天下覇道の剣。

行方が理解らなつた蒼剣が見つかったと黒抄国主・黒王こくおうこと黒狼こくろうが知つたのは、前霸王死去七年後。だが、それは当時に彼の怒りと憎悪が一気に吹き上げた瞬間であつた。

「——蒼王の元にあるだとオ……、正統な覇家の吾ではなく……」

「黒王陛下、蒼剣を奪いましょう。蒼国の蒼王さまは王不適格、蒼剣を持つに値しないかと」

「当然だっ……！奪うだけでは腹の虫が収まらぬわ。闇己、理解つておろう？」

「よろしいのでございますか？腹違いではございますが、末の弟君を」

「吾に、そのような者はおらぬ。好きにせよ」

「畏まりましてございます、我が霸王陛下」

「霸王か……よい響きだな。ククク」

残忍な笑みを零し、黒王は杯を一気に煽つた。

こうして、北と東の間に歪みが生じ、人々は益々蒼剣に吸い寄せられていく。主を失えば剣は再び彷徨う、次なる主を求めて。

だが、蒼剣に吸い寄せられるのは黒王のような男だけとは限らない。

霸王の為に剣を振るう“四獣聖”と呼ばれる親衛隊がそれである。

「——せいが 清雅さま、お腹空きませんか？」

「お前なあ、よくこんな時にそんな呑気な事を云えるな。状況理

解ってねえな」

「理解ってますよ。命狙われて追われるんですよ」

「相手は、黒抄の黒狼だ。相変わらず自分の手は汚さすってか？
腹黒男め」

背まで伸ばし放題の髪を乱暴に掻き上げ、清雅は気にいらげに舌打ちをした。

年は二十五、軽く武装しているものの兵士でなく、どちらかというとその言葉使いから野武のぶの類のような汚れようであった。野武とは、今で云う傭兵の事を云う。

「清雅さま、そんなに堂々と」

「本当の事じゃねえか」

「聞こえますって。未だ蒼国領内じゃないんですよ」

「俺は構わないぜ、白虎びゃっこ。ここで一暴れしても」

「やめてください。火に油です」

「ま、蒼国じやうこくに黒抄を迎え撃つ戦力ないのは知ってるが」

月明かりを頼りに森を進みながら、彼らは一路、蒼国・王都を目指していた。

彼ら——特に清雅は、黒抄国の親衛隊に命を狙われている。

僅か数分の内に五人を倒してから、また一段とその刺客は増えたような気がする。

無理もない。黒抄最強を誇る親衛隊所属の人間をあっさりと倒されて、黒抄が黙っているわけがなかった。

しかも、倒した男は蒼国の人間となれば。

「清雅さま」

「また出たか」

白虎同様気配に気づいた清雅が、嫌そうに眉を寄せた。

「——四獣聖の蒼龍、白虎だな」

「だったらどうする？」

完全に戦闘モードに入った清雅は、剣を抜くと同時に飛躍していた。

この時、同じように蒼国を目指すもう一組がいた。
共に蒼国を目指す二人だがその思いは違っていた。

憧れの“四獣聖”を目指す少年と、元四獣聖・玄武である父親。
蒼国を目指すと言う事が今まで以上に危険だと理解しているのは、
父親の方だろう。

「ここを抜ければ、蒼国領内なんですか？父上」

「人目につかぬようにするにはな」

「東海道を行くのが早道では？」

「その東海道に、我々を蒼国に入れたがらない奴らが待っていて
もか？拓海^{たくみ}」

「…会いたくないですね…」

「ここを無事に通れると云う保証もないが」

「ちょ…、父上…」

すうつと血の気が引く気がして、拓海は後悔した。

父のような剣の使い手になりたい——しかも、伝説の霸王親衛
隊“四獣聖”に。

その父が、七年絶って蒼国に行くと言う。

前霸王死去から七年、四獣聖は四散したと云うがその一人であつ
た父が動くと云う事は新たな霸王の誕生を意味している事に他なら
ない。

何よりも、彼を動かしせしめた最大の要因は蒼国国主・蒼王が元
玄武・狼靖とは叔父と甥と関係にあり、その蒼王の命が狙われてい
ると聞いたからだ。

「お前も四獣聖になる気があるのなら、覚悟して来るんだな」
月明かりがあるものの、どちらかと云うと見通しのいい東海道よ
り森の中の方が危険極まりないのだが、身を隠すと云う点ではいい
だろう。

しかし、同じ事を敵も考えていた事に狼靖は顔を硬くした。

「——こんな所で、貴方に会うとは思いませんでしたよ。玄武
さま」

「吾もだよ、闇己。随分出世したようだが？」

「黒王陛下のお陰ですよ。玄武さま、黒王陛下は貴方の命を御所望です。理由はご存じでしょう」

「吾が蒼王さまの叔父だからか？」

「それもあるでしょうが、我が王が許せないのは貴方が蒼王さまに蒼剣をお渡しになった事です」

「剣の意思だ。蒼剣がどういうものか知っていよう？」

「だが、蒼王さまは霸王には興味ないようすな。会議はすつぽかす、城は抜け出す、賊相手に自ら剣を振り回す、そのような方が霸王陛下の血筋とは……」

「随分な云われようだ」

側にいた拓海は、一層後悔する。

どう考えても、これから向かう蒼国の国主はまともには思えない。十八歳になるまで、野武として自由に育ったと云う蒼王は七年前突然、蒼国国主になった。

前霸王の末子にして、平民の母をもつ彼はそれまで霸王家の生活など無縁で、自分が前霸王の子など知らなかったという。それが突然「王になれ」と担がれて、彼にとって青天の霹靂だろう。

「貴方に勝ち目はありませよ。どうやらご子息殿はまだ剣を振るえぬようですから」

「蒼王さまを殺しても、蒼剣が黒王さまを選ぶとは思えんが」

「たかが剣一振り、従わせずして霸王ではないでしょう」

元四獣聖でも敵は十数人、圧倒的不利である。

——— こういう場合、正義の味方が現れるものだ。

昔読んだ絵本を思い出し、拓海は目を瞑った。

——— そんな都合よく、来るわけないけど。

キンッ———。

金属がぶつかる音が、響く。

「お怪我は？玄武どの」

銀髪に碧眼の青年が、狼靖父子の盾となった。

「白虎どの、貴方がいるという事は…」

その前方で、数十人相手に剣を振るっているもう一人の男に、狼靖はやっぱりと呟いた。

「ち、父上、白虎つてもうしかして…」

「おや？玄武とのお子息ですか？」

「四獣聖の白虎…さま？」

銀髪の青年は、につこりと微笑んだ。

「おい、白虎。まさかそこで見物しているつもりじゃねえだろうな」

「勿論ですよ、清雅さま。ただ、ここを離れるとお二人が危険かと」

「心配いらん。その男は元玄武だぜ。なあ？狼靖」

「元は余計です」

それは、鮮やかなものだった。

拓海の尊敬する四獣聖の内、二人が揃い、更には口は悪いが彼らを凌ぐ剣捌きの男が加わって、形勢は瞬時に逆転した。

「…吾は運がいい」

「そりゃあよかったな。俺は、ついてない。この一月で何度狙われたか。お前の主人の執念深さの所為でな」

「執念深さでは貴方も負けてませんよ、蒼龍の清雅さま」

「ふん。嫌味は健在だな」

闇己が振りかざした剣は、宙を舞い、地に刺さった。

「吾々は、諦めませんよ」

「今度は、その口引き裂いてやる」

舌戦では負けていない清雅に、闇己は踵を返した。

啞然とする拓海を前に、狼靖が声を上げた。

「…清雅さまっ、今度は何をやっただんです」

「お前まで、人を犯罪者扱いか？狼靖」

「充分、前科がありますので」

清雅は、めんどくさいと云わんばかりに髪を掻き上げた。

そんな清雅に、狼靖の息子・拓海は未だ啞然としている。

年長の狼靖に上目線なのは勿論、よほどの悪行を重ねたのか前科もちと云う四獣聖・蒼龍。

拓海 of 四獣聖への印象を一気に崩しかねないこの男の存在が、後に拓海を変えていくとはこの時拓海は知る由はなかった。

だが、ここに蒼龍、玄武、白虎の四獣聖の内三人が揃ったことになる。

目指すは同じ、蒼国・王都。

「——うめ 瑠邑さま」

「陛下は、お帰りになられたのか？」

「いえ、未だお戻りにはなっておりません。ですが、そろそろ重臣の方々が御騒ぎになりました。陛下が城を御開けになるのは今に始まった事ではありませんが、今回は少し遅すぎます。黒抄の黒王さまの動きが、この期を逃しはしないでしよう」

「確かに、今攻め込まれたらひとたまりもないな」

都を一望する室の中で、蒼国宰相・瑠邑は唇に笑みを浮かべた。

七年前、蒼国建国と同時に若き蒼国国主・蒼王の補佐に就いた瑠邑は、蒼王不在と聞いても落ち着いていた。

「申し上げます。四獣聖・朱雀さまがお越しです」

「朱雀どのが？」

「如何いたしましょうか？」

「——吾の許可が必要ですか？朱雀どの」

取り次ぎの背後にいつの間にか立つ人影に、瑠邑はその笑みのまま羽扇を煽いだ。

「蒼王は、戻ってるよ」

四獣聖最後の一人、朱雀は悪戯な笑みを浮かべ、そう告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3271i/>

霸王伝____蒼剣の舞い

2011年1月6日14時18分発行